

慶應四年戊辰二月

太政官日誌

第一

定價銀壹文目

2478
261





二月十四日早半刻ヨリ申ノ刻ニテニ大坂西本願寺ニ於テ

醍醐大納言殿東久世前少將殿宇和島少將殿各國公使ト應接ノ始末左ノ如シ

但外國事務掛及ヒ諸藩家老列座

一東久世殿發話我日本政體王政復古

帝自ラ政權ヲ握シ外國ノ交際モ一切

朝廷ニテ曳請裁判可致旨意ハ過日兵庫ニ於テ布告セシ如ク相違アルナシ此節外國事

務局ヲ建立シ交易通商一切ノ諸事件悉ク外
國事務官ノ裁決ニアルヲ以テ今日改メテ
朝廷守護ノ列藩ト共ニ各國公使ニ會同シ此
盟約ヲ定ム自後普ク日本人民ト外國人民ト
ノ交際厚ク誠實ヲ盡シ互ニ疑惑ナキヲ以テ
主意トナサン故ニ大小ノ事件外國ニ關係ス
ルノ務ハ外國事務局ノ專任ナルヲ以テ我等
ニ就テ

帝ニ建言スルヲ要セヨ

各國公使曰先般兵庫ニテ布告アリシ其證

明白ニシテ今日改メテ列藩會議

帝普ク政令ヲ下シ兩國人民ノ為メ廣ク信
睦ヲ求メ互ニ誠實ヲ旨トナスハ我各國ニ
於テモ兼々渴望セシ處ニシテ感悅之至ニ
堪ス自今 朝廷

帝ヲ以テ日本ノ主府ト仰キ萬事其政令ヲ
奉セントス

一亦曰此度萬國ト我カ

帝ト條約ヲ改メシ上ハ各國公使ニ

帝自ラ對面シ盟約ヲ立ン故ニ不日上京アル

へキ旨各國公使エ可申入

帝ノ命ヲ奉シ候

公使曰恐入候談合ノ上明後日否可申上

一亦曰當今戦争ノ後ハ京攝及ヒ諸所ニ鎮撫ノ師ヲ出シ過半其政令行ハレ既ニ各國ノ諸侯ヲシテ徳川慶喜征討ノ師京ヲ發セシ上ハ不日ニ其成功アルヘキハ勿論ナリ自ラ横濱箱館外國人在住ノ場所ハ朝廷ノ官吏ヨリ人民安堵ノ令ヲ下スヘシ則慶喜ヲ征討スル事實明白ノ罪狀書面ヲ布告

スヘキナリ

公使曰慶喜ヲ討伐ノ師既ニ京師ヲ發セシ上ハ關東ノ形勢安心ナリカタシ若早ク帝ニ拜謁スル能ハズンハ速ニ浪華ヲ去リ横濱ニ在ル人民ノ為メニ彼地ヲ鎮靜セシ
ヲ欲ス

一亦曰明日中ニハ上京ノ日限申来ルヘク夫マテ滞坂其上進退セララルヘシ

公使曰

帝ニ謁スル期限ノ日數ヲ確定シ以テ此事

外國市應接之儀と上代

崇神

仲哀沛兩朝の頃より年茲逐る盛る成来り遠邇
の各國帰化貢獻有之其後唐國とも常ニ使節相
往來或ハ居留一其交際も亦自ら親交を此時ニ
當リ船艦の利未ダ開けず故ニ三韓四近と唐國
而已西洋各國の事も暫差置テ度地方尚明確な
らば然るニ近代ニ至り而も萬民所知の如く
船艦の利航海の術其妙茂窮め萬里の彼濤比隣
の如く相往來一一時幕府の失措トハ乍ら申

皇國の政府は於て誓約有之は事ハ時ハ得失ハ
因テ其條目ハ可被改テ得共其大體ハ至リ以テ
妄ハ不可動事萬國普通ハ公法ハ一ハ今更於
朝廷是改變革セラレハ時ハ却テ信義を海外各
國ハ失ハセラレ實以不容易大事ハ付不被為得
止於幕府相定置テ條約を以テ和親歩取結ハ相
成テ既ハ先般テ布令被為在升上ナ

皇國固有ハ清國體ハ萬國ハ公法ハ以テ斟酌テ
採用ハ相成テ是亦不被為得止テ事ハ亦仍
越前宰相以下建白ハ旨趣ハ基址廣ク百官諸藩

ハ公議ハ依リ古今ハ得失ハ萬國交際ハ且以折
衷セラレ今般外國公使入京參

朝被 仰付テ元來膺懲ハ舉ハ萬古不朽ハ公
道ハ一ハ以テ和親を講スルハ其曲直ハ依
各國不得止ハ師相起リテ其例ハ不少付テ攻
守ハ覺悟勿論ハ事ハ亦得兵和親ハ事ハ於

先朝既ハ開港被差許テ付

皇國ハ各國ハ此和親爰ハ相始リ居テ處其節
幕府ハ亦委任ハ儀ハ付諸事交際ハ儀於幕府取
扱来リテ然ル處此度

王政一新萬機送

朝廷被仰出升る有る各國交際儀直に於
朝廷清取扱に可相成り元より清事に於今や
御初政に清時総而る事件に全く總裁始當職に
責に有るに何分某等不肖に身に以て大任を負
荷に非常多難に時を逢に上り深く恐懼思慮に
加へ天下に公論に以て及
奏聞今般に事件清決定被為在り且國內未夕定
らる海外萬國交際に大事有るに得る普天率濱
協心戮力共々

王事に勤勞に萬國交際に始萬機悉く既往將來
に不論無忌憚詳論極諫有る度只急務とする處
に時勢に應に活眼を開き、從前に弊習を脱し
聖徳に萬國に光耀し天下に富岳に安に置に
列聖在天に神靈に可奉慰上下奉る此趣意を可
奉謹承在事

太政官代

三職

二月十七日

官版

不許翻刻

御用御書物所

東洞院三條上町

村上勘兵衛

堀川二條下町

井上治兵衛

慶應四年戊辰二月

太政官日誌

第二

三職

總裁職宮任之副總裁公卿諸侯任之

萬機ヲ總ヘ一切ノ事務ヲ裁決ス

議定職宮公卿諸侯任之

事務各課ヲ分督シ議事ヲ定決ス

參與職公卿諸侯徵士任之

事務ヲ參議シ各課ヲ分務ス

八局

總裁局

神祇事務局

神祇祭祀祝部神戸ノ事ヲ督ス

内國事務局

京畿庶務及諸國水陸運輸驛路關市都城港口

鎮臺市尹ノ事ヲ督ス

外國事務局

外國交際條約貿易拓地育民ノ事ヲ督ス

軍防事務局

海軍陸軍練兵守衛緩急軍務ノ事ヲ督ス

會計事務局

戸口賦税金穀用度貢獻營繕秩祿倉庫及商法ノ事ヲ督ス

刑法事務局

監察彈糾捕亡斷獄諸刑律ノ事ヲ督ス

制度事務局

官職制度名分儀制選叙考課諸規則ノ事ヲ督ス

徵士貢士

徵士 無定員

諸藩士及都鄙有才ノ者公議ニ執リ拔擢セラ
ル則徵士ト命ス參與職各局ノ判事ニ任ス又
其一官ヲ命シテ參與職ニ任セサル者アリ在
職四年ニシテ退ク廣ク賢才ニ讓ルヲ要トス
若其人當器尚退クヘカラサル者ハ又四年ヲ
延テ八年トス衆議ニ執ルヘシ

貢士 大藩四十萬石以上三員中藩十萬石以上三
十九萬石二至ル二員小藩一萬石以上九萬
石一至一員

諸藩士其主ノ撰ニ任セ下ノ議事所ヘ差出ス
者ヲ貢士トス則議事官タリ輿論公議ヲ執ル

ヲ旨トス貢士定員アツテ年限ナシ其主ノ進
退スル處ニ任ス又其才能ニ因テ徵士ニ選
舉スヘシ

- 總裁 議定 有栖川 帥 宮
- 副總裁 議定 三條 大納言
- 同 同 岩倉 右兵衛督
- 輔弼 議定 中山 前大納言
- 同 同 正親町三條前大納言
- 顧問 參典 當分外國 小松 帶刀
- 同 同 兼 後藤 象二郎

○內國事務

督議定

輔同

權參與

同同

判事參與

同同

同同

同同

德大寺大納言

越前宰相

岩倉侍從

秋月右京亮

中川對馬

辻將曹

廣澤兵助

大久保一藏

同同

同同

同同

同同

同同

同同

○外國事務

督議定

輔同

權參與

中根雪江

青山小三郎

土肥謙藏

五辻大夫

王松操

山中靜逸

山階宮

宇和嶋少將

東久世前少將

同 議定
判事 參共
同 同
同 同
同 同
同 同
同 同
同 同
同 同
○軍防事務
督 議定
輔

肥前 侍從
岩下左次右衛門
町田 民部
伊藤 俊助
五代 才助
寺嶋 陶藏
井關齋右衛門
井上 閑多
仁和寺官

權 參與
判事 同
同 同
同 同
同 同
○會計事務
督 議定
輔 同
權 參共
判事 同

烏丸 侍從
吉田 遠江
吉井 幸輔
津田山三郎
土肥 典勝
中御門大納言
安藝 新少將
長谷美濃權介
戸田 大和守

同 同 同
同 同 同
權參與
○刑法事務
督議定
輔同
權參與
判事同
同

同
○制度事務
督議定
輔
權參與
判事參與
同
權

鴨脚 加賀
三岡 八郎
小原二兵衛
石山右兵衛權佐
迩衛新前左大臣
細川 右京大夫
五條 少納言
溝口 孤雲
木村得太郎

土倉修理助
鷹司前右大臣
堤 右京大夫
松室 豐後
福岡 藤次
井上 石見

官版 不許翻刻

御用御書物所

東洞院三條上町

村上勘兵衛

堀川三條下町

井上治兵衛

慶應四年戊辰二月

太政官日誌
第三

臣等謹而按する、古之能_く天下の大事を定むる者、必先_つ天下の大勢を觀て、緩急機に従ひ處置宜を得候故、唯功德の一時又光被するのみならず、以_て萬世不拔の業是に於て相立り、今や

皇上始_て

大統を繼せ給ひ

御政権復

一に歸_り凡百の宿弊を更始一新_し天下萬姓目を拭ひ治を望むの秋なり、即在

朝の百官自ら奮發_し内ハ

皇上の

御徳化を輔け奉り外ハ

皇威を萬國に張り、臣子之分を盡さん事哉、欲

す就中今日の急務ハ

皇國と外國との交際を講明せしめて不叶儀
又奉存侯近頃

朝廷始て外國事務の官職を設らば其人を御
撰擧遊され専ら御力成盡され侯ハ天下の人
を以て方向する處を知りしめ給はんとの
御趣意よて

皇威成萬國に赫耀せしめ侯ハ此時に可有之
と不堪感銘奉存侯乍候古語も人心不同ハ
面の如しと申侯而在上在下の人未と各々區

々の議を執て疑惑なき事能ハす又或ハ漢土
人の如く自ら尊大にして外國人を禽獸の如
く蔑視終よハ彼にお負却て驅使せらる候様
に成行き候覆轍を踐むに至る危き死と甚憂
慮仕候依而熟考仕候處今日之先務ハ上下協
同一和し宇内之形勢を辨し

皇國一大草して開業すへき所以方向確定す
へき儀第一と奉存侯是迄

皇國ハ一方に孤立し世界の事情に不達只偷
安を以て志とし荏苒衰微を致し彼カ爲に制

せらるへき次第に立至候と各國に航行し衆
善を包取氣運日々に開け政治文明兵食充備
天下に縦横致し候と比較いたし候得ハ盛衰
之原由も判然相分り可申哉に奉存候元より
膺懲の重典も無くて不叶儀ハ候得共控御
之術其方を得候へハ遠人も懐き服し候道理
よて尤無罪之人を膺懲致し候記ハ無之候
中古

其後天正慶長の間ハ蛮夷共屢西國に渡來
交易致し候若し其來港不致節ハ大將軍より
書簡を以て促さし猶遲緩に及候時ハ此方
より大軍を發し攻撃し可及なせと申遣し候
儀も有之候處島原の一乱以來始て幕府より
鎖國の令有之候乍倭漢土和蘭に於てハ猶交
易差許候得ハ一切ハ外國人ハ攘ひ存け候と
申訣ハ更に無之處近年攘夷之論盛に相起
り諸侯之内偶攘斥致し候戎有之候得共素よ
り一藩の力を以て不可爲ハ論するに足ら候

且先年幕府より十年を期して成功を奏し可
申杯と申上候ハ陽ニ其名を假り陰ニ其私を
行ひ候詐術にて

先帝日夜 御若慮被爲遊候御儀トハ同年
之論ニハ無之と奉存候然トハ今日

皇國之衰運を挽回し

皇威を海外ニ耀し候儀萬々一刀兩断之
朝裁成以て井蛙管見之僻論を去り先在
廷樞要之御方々より御豁眼ニ被爲成上下同
心して交際之道無二念開せられ彼長取

我^カ短と補ひ萬世之大基礎相据らと候様奉專
禱候仰願くハ

皇上之 御英断能く天下之大勢を御觀察
被爲遊是迨犬羊戎狄と相唱候愚論を去り漠
土と齊しく視させられ候

朝典を一定せらと萬國普通之公法ヲ以テ泰
朝をも被命候様御賛成被爲在其旨海内へ布
告して永く億兆之人民をして方向成知らし
免たまひ度儀と偏し奉懇願候誠恐誠惶頓首
頓首

二月七日

越前宰相
土佐前少將
長門少將
薩摩少將
安藝新少將
細川右京大夫

臣廣封謹而奉言上候先般越前宰相一同建言之
儀癸丑己降天下之勢屢變遷遂今日之御時體
卜相成候而者曰下之御處置右建言之處着落
仕候外無御座下奉存連署奉言上候抑既往ヲ推
究仕候處幕府一旦其術ヲ失候而ヨリ御國是屢
變換閉鎖之論一定不仕天下是力爲ニ肝腦塗地
候者不可枚舉悲歎之至ニ奉存候然處臣廣封父
子追々陳述仕候通癸丑己來備ニ
皇威御更張國是御一定ヲ奉企望唯管
獻慮ニ奉基名義條理相立候様ニ卜不顧微力藩

屏之任一途心懸罷在候内戊午下田條約被差許
候ニ付而者即チ開國ニ御一定ト奉存一藩方向
相立居候處壬戌ニ至リ父子上京親ク奉伺候得
者 和宮御東下一條ヲ奉始

獻旨專ラ鎖國ニ被為在候御事奉拜承殊ニ癸亥
ニ至大樹家上洛奉 勅攘斥之布告相成候ニ付
彌以艱難危急者臣子之分ニ付

天恩之萬一ヲ奉報度ト決心仕人民ヲ鼓舞激勵
シ身ヲ以テ自先シ候處臣廣封父子之微誠貫徹
不仕遂ニ孤立之姿ト相成 闕下ニ拜趨不得仕

次第ニ立至候得共元來臣廣封父子進退趨舍一
己私見ニ出候儀毫厘モ無之偏ニ

叡慮遵奉之心得ニ御座候處幕府布令前後離離
ヨリシテ御國是從而變換シ臣廣封父子禍難ニ
陷溺仕候様相成此餘者社稷ト共ニ灰滅仕候外
無之ト覺悟罷在候處 乾綱新張今日之

御盛時ニ遭遇シ再生之 鴻恩ヲ奉蒙感泣之至
ニ奉存候然處四境閉塞以來國外之情態甚迂濶
ニ打過候得共外國交際之儀其他種々被為盡
廷議候御様子略傳承仕リ今般上京親シク先年

來之御行懸等精細相窺候得者既ニ開港
敷許海外各國江御布告被爲有既ニ御國是御確
定開國之御規模被爲立候御儀續而

王政御一新萬機

御親裁之秋ト相成候付

而者内外之形勢前日之比ニ無之即チ國家之御
安危 皇威之御隆替辱クモ 御聖徳ニ

關係仕今後之御舉指最重大之儀ト奉存候ニ付
外國御交際者宇内公義之係ル所内國一家之紛
擾ヲ以宇内之公義ヲ害候様ニ而者萬國ニ對シ
可愧儀ニ御坐候間乍恐

神武之

御聖業ヲ

御體認被爲遊專ラ天下之耳目ヲ一新シ人心之
方嚮ヲ相定メ確乎不拔之 聖斷ヲ以テ

天下ニ

歸御被爲遊外者宇内萬國ニ并立

シテ不被爲愧内者

列聖之神靈ニ被爲

對 御遺憾無之様不堪懇願之至誠恐誠惶頓
首謹言

二月

長門少將

官版

不許翻刻

御用御書物所

東洞院三條上町

村上勘兵衛

堀川二條下町

井上治兵衛

慶應四年戊辰三月

太政官日誌 第四

二月二十八日

皇帝陛下親シク列侯ヲ玉座近ク被為 召詔

曰朕夙ニ天位ヲ紹キ今日天下一新ノ運ニ膺
リ文武一途公議ヲ親裁ス國威之立不立蒼生
之安不安ハ朕カ天職ヲ盡不盡ニ有レハ日夜
不安寢食甚心思ヲ勞ス朕不肖ト雖モ

列聖之餘業

先帝之遺意ヲ繼述シ内ハ列藩萬姓ヲ撫安シ
外ハ國威ヲ海外ニ耀サン事ヲ欲ス然ルニ德
川慶喜不軌ヲ謀リ天下解體遂及騷擾万民

塗炭之苦ニ陷トス故朕不得已断然親征之
議ヲ決セリ且己ニ布告セシ通リ外國交際
モ有之上ハ將末之憂置尤重大ニ付天下萬
姓之為ニ於テ八萬里之波濤ヲ凌キ身ヲ以
艱苦ニ當リ誓テ國威ヲ海外ニ振張シ

祖宗

先帝之神靈ニ對ント欲ス汝列藩朕カ不逮ヲ
佐ケ同心協力各其分ヲ盡シ奮テ國家ノ
為ニ努力セヨ

各國公使參

朝之件々左ニ記ス

一 前日各國公使工何刻西洋第令參

内之旨外國事務補ヨリ書翰ヲ以三ヶ國公使
工通達ス

一 當日各國公使參

内之節外國掛リ公卿諸侯建春門内迄出迎
但外國掛リ判事一人ツ、公使旅館迄前導
トシテ被遣公使同道ニテ參
内ス

一 公使虎ノ間迄誘引外國事務補相勤

但判事附添

一 虎ノ間座席進退外國掛リ公卿諸侯相勤

但判事準之

一 茶菓ヲ賜フ程合ハ外國掛リ判事取計ヒ配膳

ハ使番ニテ取扱フ

一 各國公使相揃候段外國掛公卿諸侯ヨリ以非

藏人注進

一 副總裁及外國事務督輔内國事務督輔出會ス

一 皇帝出御于南殿

一 内國事務輔

出御之旨ヲ外國掛リ公卿諸侯ニ通達ス

一 外國掛リ公卿諸侯公使ヲ誘引ス

但虎ノ間ヨリ日華門内ノ東階ニテ誘引走

ヨリ直ニ昇

殿

但判事士微日華門外ニテ外國掛リ非藏人ハ

東階下ニテ附添

一 日華門内外國掛リ公卿諸侯誘引之先へ内國事務輔前導ス

- 一 公使ノ日華門内ニ入ルヲ見テ樂ヲ奏ス
- 一 前導ノ内國事務輔誘引レテ直ニ本座ニ着ス
- 一 公使東階ヨリ昇
- 殿外國掛リ輔誘引ス
- 一 公使拜
- 天顔
- 一 公使名披露山階官三條大納言侍ス通譯外
- 事務判事伊藤俊介亦侍ス
- 一 有
- 勅語大臣^{山階}三條之レヲ傳フ

- 一 公使奉答ス
- 一 判事公使ノ奉答ヲ言上ス
- 一 公使隨從之士官進テ拜
- 天顔
- 一 隨從士官名披露判事言上ス
- 一 判事傳
- 勅旨
- 一 禮式相濟公使西階ヲ下リ月華門ヨリ退ク
- 一 公使ノ月華門外ニ出ルヲ見テ奏樂ヲ止ム

二月三十日午ノ半刻佛國公使レヲシ
ユベニユス 船將ロワシユピレツキス 船將
ペテイトワール參
朝

但副總裁始メ公卿諸侯及掛リ役員列座
一皇帝陛下親シク敕曰貴國帝王安全ナルヤ朕
之ヲ喜悅ス自今兩國之交際益親睦永久不
變ヲ希望ス

佛公使曰

天皇陛下今日各國公使等ニ拜謁ヲ

賜ヒシハ余佛國ニ對シ玉ヒテ御厚意ナル
確證ト仰キ奉ル也 貴國ノ衆民ニ於テモ
如斯高明ナル證ヲ知ル上ハ即チ

天皇陛下ノ尊キ御宸意ヲ遵奉スルヲ疑ヲ容
レサル所ナリ故ニ今日ハ即後來ニ長ク祈
念スヘキ日ニシテ 貴國ト各國ト至誠ノ
交誼ヲ親クスル始ナルヲ以テ余我國帝陛
下ニ代リ

天皇陛下并ニ貴國ノ幸福盛美ヲ祈リ深ク神明
ノ守護アラントヲ奉願也

同日和蘭國公使デーテクチフアンポルスブ
ロツク書記クラインケース參

朝

一皇帝陛下自カラ敕スル前ノ如ク
和蘭公使曰隨近報兼リ候處和蘭國王陛
下安全也

天皇陛下長ク御安全ヲ保セ玉ヒ且御在位幾
多ノ年ヲ重子玉ハンコヲ希望シ奉ル也

三月三日英國公使ハルソーパークス書記
ミットホールド參

朝

一 皇帝陛下自カラ敕スル前ノ如シ

英公使曰我本國帝王陛下安全也

天皇陛下御尋問ノ伴々且御懇親ノ

敕意余欣然トシテ本國政府ニ可奉通達也

夫外國交際ノ儀ハ 貴國御政體ノ立ニ隨

テ益堅固ナルヘク事ニシテ此節 貴國ニ

於テ全國一般ノ御政躰ヲ被為立萬國ノ公

法ヲ基根ト被為遊シ故追々外國交際盛ナ
ルヘキ義必然ト奉存也

皇帝陛下又敕曰去ル三十日貴公使參朝途中
不慮之儀出來禮式延引遺憾之至ニ候今日

改テ參朝満足ニ存候

英公使曰先日參

内ノ途中暴發ニ出會セシ所今日

天皇陛下ヨリ難有御倫言ヲ蒙リ且其場ニ於
テハ

天皇陛下臣人ノ助カヲ受ケ難有奉感佩尚今

日ノ厚キ御待遇ヲ以過日ノ不幸ハ奉忘除候也

右之通ニテ相濟退出セリ

二ノ七

官版

不許翻刻

御用御書物所

東洞院三條上町

村上勘兵衛

堀川二條下町

井上治兵衛

慶應四年戊辰三月

太政官日誌

第七

14
20
25

德川慶喜御處分儀於

朝廷者諸事御寛容被

思食御沙汰被

仰出候處舊冬鎮定と名く下

坂之上軍配、及び候次第始終言行相違上月三

日以来之舉動叛逆顯然其罪天下萬民之所共知

二候故不被為得止 大號令御發表終二

御英斷を以て

御親征被 仰出勤 王之諸藩私情を捨て公義二

基き諸兵大總督に附属一已に賊城に相臨候折

柄恭順謝罪之實效も更ニ無之尚先供之行違等と

口實とつしし剩り停軍相願候次第

朝廷と奉輕蔑候所為にて不届之至候對天下後世決而御許容難被遊候儀可有之假令御許容被為在候而茂前条暴入之轍出候式茂難計御條理上者勿論彼之情實萬々御採用難相成却而人心之疑惑と生候而者以御時合不容易儀付大義名分篤と勘辨以々以来私文通等之儀於有之者逆徒均一と筋候間屹度御沙汰可有之候事

三月

東山道先鋒諸藩の届書寫

東山道出兵本藩人數信州上諏訪に於て依命致手分甲州路罷越本月五日甲府に到着即日城代佐藤駿河守に及談判府城受取候然翌六日朝賊徒共府城より三里許東に著陣候由相聞石和驛迄存候差出候得者勝沼驛に致屯駐候に付因州高遠二藩及本藩之兵同時押寄候處驛中、關門と設け官軍を差障候躰に付押破り其番兵と追拂夫より惣勢共三手に分ち一手八因州一小隊本藩大砲隊長長北村本街道より進み下

手ハ因州高遠之兵本藩小隊隊長小笠原謙吉吉川を渡り
右ノ方より進一ト手ハ本藩小隊隊長谷左ノ山を
攀ら敵背へ出候様約束定置操出候處賊徒共
街道の橋を撤一砲臺を築き罷在忽ち互互發砲賊
徒ハ民家を放火一谷を隔て防戦長兵衛隊及苦
戦候折柄因州勢其應援之為め左ノ山に登り又因
州高遠之兵及謙吉隊右ノ山に登り雙方より發砲
合撃一賊徒共一時計り防禦候得共神兵衛隊
急一敵背へ出賊三人討取大音と揚け山上一餘
賊と追下候故賊衆落膽要害を棄て候付三面より

追撃一神兵衛隊砲臺を奪ひ賊徒共敗走一少一
退又防戦仕候得共亦敗走一官軍進て鶴瀬驛
へ至り賊徒ハ遂ニ笹子峰を踰へ遁去候付笹子の
要害ハ因州ノ生兵へ托一甲府守衛之儀ハ真田家に
引渡本藩軍勢ハ江戸へ致進發候趣彼表軍監共一
達越候付此段御達仕候討取候首級擒獲一候
賊ノ姓名等ハ別紙ニ相認差上申候以上

覺

賊徒

保々忠太郎

柴田監 物

右之者共真田家江引渡申候

右當斬梟首仕候

會藩 山崎壯助

市川五郎

市川幸八郎

中川推五郎

原田金之丞

疋田喜一郎

佐々井安左衛門

秋鹿慶之助

首 三級

右谷神兵衛隊討取但賊ノ隊長加々爪某と申者
の首清太郎躬小橋某討取申候

首 一級

右小笠原謙吉討取申候

施條砲一挺

王丸四五計
小銃十二三挺計

合羽駕籠二荷
雜物入共

大小 二腰

右本藩兵分捕仕候

長持十荷計

右因州及本藩兵互二分捕仕候

味方 手負二人

右 北村長兵衛隊 小川彌太郎銃丸中り手を傷き

小笠原謙吉隊

今井和助謙吉と助け賊と戦被傷申上

右之通ニ御座候以上

三月十五日

山内土佐守

辰三月六日午刻於甲州勝沼驛大橋鳥居坂戦争
以了戦死手負分捕器撤尤之通

即死一人

手負一人

右天野祐治隊中之者ニ候

大砲一挺

小銃三挺

大砲胴叩一ツ

太鼓負皮一ツ

太砲玉薬扱

右藤田東天野祐治手之而分捕仕候

小銃 三挺

右佐分利九允組士之内之而分捕仕候

小銃 三挺

右馬場金吾足立真藏分捕仕候

右之通御座候此段御届申上候以上

三月

因州 和田壹岐

當月八日武州羽丹生村邊之歩兵屯集之由之付
薩州長州兵弊藩人數為存候操出候處藥田宿之
集り居候之付一同出進翌九日朝六ツ半時過より
及砲戰九ツ時頃迄ニ賊徒盡く敗走討取分捕亦も
多分有之趣急便と以申越候故出先
御總督御本陣にも御届申上候趣ニ者御座候得
共此段不取敢御届申上候以上

三月十七日

戸田采女正

因州 土州 薩州 長州 大垣

右甲州勝沼驛武州羽丹生村兩所、おのゝ賊
徒屯集砲銃と以て要地と據り官軍と相抗候
處遂勇戰忽及掃擊殊々初戦之儀三軍之氣鋒
を興一現地之情實達

敬聞御満足之被
思食候猶此上擢精忠速ニ賊巢令平定可奉安
宸襟旨被 仰出候此段戦士に可相達
御沙汰候事

三月十九日

官版 不許翻刻

御用御書物所

東洞院 三條上ル町

村上勘兵衛

堀川二條下ル町

井上治兵衛

